

大和石上神宮と鉄斎

— 8月25日(金)毎日テレビ「真珠の小宮」にて放映予定 —

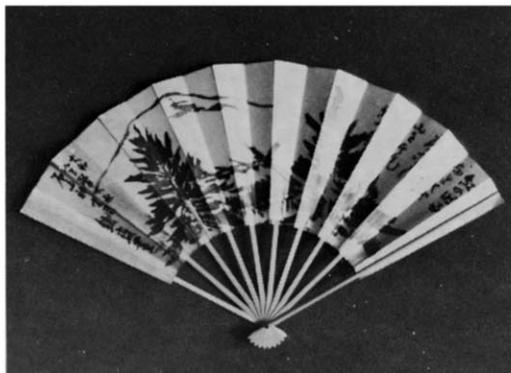
石上神宮は、万葉集のふるさと石上振（いそのかみふる）の里に在り、古くは布留社、布都御魂神社ともいわれた。社殿は崇神天皇の御代に創建され、祭神は神武天皇が河内和泉を平定の際に荒振神を鎮めた布都御魂神を祀り、垂仁天皇の御代にも一千口の刀剣を納めて国家の鎮護を祈ったと伝えられている。社殿は延喜式によると正殿及び佐伯、大伴の三殿が在ったと伝えられるがのちに壊滅し、明治初年には楼門、拝殿、神庫をのこすのみとなっていた。拝殿の奥には禁足地があって、そこには室町時代に度々盗賊に襲われたので神宝を埋めたと伝えられていた。明治7年宮司は教務省の許可を得て禁足地を発掘し、神剣一口、鈴一口、銚の破片、勾玉、管玉などの宝物が発見された。

この由緒ある石上神社に富岡鉄斎が少宮司として赴任したのは、明治9年5月3日である。しかし同年12月27日には和泉大鳥神社の宮司に栄進の命を受けたので、石上在任の期間は僅かに半ヶ年余の短期間に過ぎなかった。奉職中には社殿の復興にも尽力し、余暇には県令の内命によって大和御巡幸道筋の神社、御陵の絵図を作製す



るために実地踏査をしたり、紀州の方へも旅に出たり、また絵筆にも親しみ、同年記の作品が同社家の森家や旧家の中山家などに今も遺っている。鉄斎が石上を去ってから同12年には石上神社に発掘地のあとに神殿が建立されたが、その時の記念品として作られた銀地墨画の扇面（カット/下）は鉄斎が原画を描き、その板木は今も保存されている。また同じく記念として神域の池畔に「諸霊招魂碑」が建てられたが、その書は鉄斎が雄渾の筆を揮ったものである。そのうち同16年に石上神社に神宮号が復帰したときに布留街道と上街

道の合流地点に「官幣大社石上神宮」の碑（カット/上）が建てられた。この碑は今新しい参道の入口に移され、官幣大社の文字が塗りつぶされているが、謹直な書は鉄斎の人柄そのままに静寂の参道に入る人々を見下している。



季刊 美のたより No.21

昭和47年7月1日

発行 大和文華館